The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	世界遺産登録およびコロナ禍がもたらす“古墳ブーム”の変化と文化財活用の将来像
Author(s)	
Citation	令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2021
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式６

申請先学部　　文学部　採択番号　No.5

令和２年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	まつおかすずよ 松岡寿々代	学部 学科	文学部人文学科	学年	２年
ふりがな 共同 研究者氏名	いしづかれい 石束礼	学部 学科	文学部人文学科	学年	２年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	上田直弥	所属	文学研究科		
研究課題名	世界遺産登録およびコロナ禍がもたらす“古墳ブーム”の変化と文化財活用の将来像				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				

Ⅰ.研究の概要

本研究の目的は、(1)百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録という大きな出来事がもたらした古墳ブームの変化と、(2)新型コロナウイルスの感染拡大におけるブームの現状を考慮した上で、(3)今後の古墳ブームの発展と地域への貢献の方向性を追究することである。 特に(1)の目的の設定には、平成 29 年度「学部学生による自主研究奨励事業」において考古学研究室が発表した『古墳ブームによる地域活性化』に基づいた比較研究を、様々な媒体を通じて検討する。2019 年 7 月 6 日に百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録されたこと、また 2020 年上旬からの新型コロナウイルス感染拡大の影響を調査することは、今後のブームの展望とそれに伴う文化財の新たな活用方法を模索するうえで重要視されるだろうと考えられる。

そこで、これまでのブームの盛衰を調査するため、マスメディアでの取り上げられ方を新聞記事とテレビ番組、書籍の発売状況などの分析をするとともに、博物館、市町村の文化財課、古墳グッズの販売店などへの聞き取り調査を実施した。そしてこの中で課題として浮かび上がった、古墳ブームをいかにして持続させ、さらに文化財の活用を含めた保護を実現していくかという問題について、参考になる愛知県と岐阜県の取り組みを取材するに至った。

以上の結果を分析し、世界遺産百舌鳥・古市古墳群が抱える、ブームの持続と遺跡の活用の問題点を解決する手がかりについて模索した。

Ⅱ.研究の具体的内容

1. マスメディア・書籍からみた古墳ブームの推移

上述より、本研究ではまず、これまでの古墳ブームの実態を先行研究に基づいて、再検討・追加調査・異なる観点からの情報収集を行うことが不可欠である。そこで初めに新聞３社と全国版テレビ番組、書店での発売部数ランキングを調査した。また古墳ブームの変化要因と影響を捉えるため百舌鳥古市古墳群に関する出来事とも照らし合わせた。

（１）新聞記事

今回は朝日新聞、日経新聞、読売新聞の全国版記事を各新聞社のデータベースを使って調査した。それぞれ「世界遺産　古墳」のキーワード検索にかけ、それらの語を含む記事の件数を 2000 年 1 月～2020 年 12 月において月別にグラフ化した。

その結果、2000 年以降月に多くても５件程度で全くない月も多く見られたが、2015 年頃から次第に月に約 10 件程度に増えたことがわかった。2017 年５月と 8 月に全ての新聞社の記事で 20 本弱に急上昇をみせる。記事の内容を確認すると、大阪府知事が百舌鳥・古市古墳群の世界遺産候補へ推薦したことや登録に残る課題なども複数報道されているが、2017 年 7 月 9 日に無事世界遺産登録を決めた『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群についての報道や北海道・北東北の縄文遺跡群が政府の推薦を目指すという記事も多く見られた。国内全体として歴史遺産に注目が集まった時期であったことがわかる。2019 年 5 月は読売新聞で 33 本と最高記録に達し、6 月も各社 10 本を超える記事が掲載された。これは百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録が確実視されたことによるもので、登録までの地元の人々の活動、世界遺産効果に沸く地元の声や古墳をモチーフにしたグッズなどが報道された。世界遺産登録が決まった日を含む 2019 年 7 月は日経新聞が 33 本の記事を掲載するなど、各社 20 以上の記事で世界遺産登録を伝えた。登録 1 か月後から緩やかに記事数は減っていったが、2020 年 1 月から 5 月にかけての激減はコロナウイルス感染拡大の影響が大きかったのではないか。その後登録 1 周年を記念する記事が 8 月頃をピークに増えた。

次に記事の内容として読売新聞を 2018 年から 2020 年の期間で調査した。2018 年は世界遺産登録関係のニュースが主で社説と特集として 11 月と 12 月に古墳や文化財について紙面が割かれた。2019 年の 5 月から 7 月はニュースとともに少し踏み込んだ内容や識者のインタビューも増え、古墳をめぐる新聞社のツアーなども見られた。8 月 9 月には登録後に見えてきた観光面の問題の議論についての記事が多かった。

このように百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録前後における新聞記事数の変化から、人々が古墳群にどれほど関心を持ってきたかが明らかになった。新聞記事の数がそのまま古墳ブームに直結するかは検討の余地があるが、少なくとも世界遺産登録時期に古墳に注目が集まったことは確かであろう。

（２）テレビ番組

テレビ番組も（１）の新聞記事と同様に「世界遺産　古墳」のキーワードで検索し、NHK と民放テレビそれぞれで番組の内容とともに集計した。検索時期は、NHK は 2017 年９月～2020 年 12 月まで、民放テレビは 2018 年１月～2020 年 12 月までの番組をアーカイブとテレビ紹介情報で調査した。

まず NHK の番組において 2017 年、2018 年頃には百舌鳥・古市古墳群が世界遺産へ推薦されたというニュースなどについて担当解説員が深く解説するといった比較的真面目な番組が多く、放送時間からも仕事帰りの社会人を視聴対象として製作されたと推測する。2019 年 5 月には世界遺産登録の見通しがたったということで複数の番組で百舌鳥・古市古墳群が紹介された。ブラタモリや歴史秘話ヒストリアといった人気歴史番組は、日本中の多くの歴史ファンが百舌鳥・古市古墳群に興味を持つきっかけを作っただろう。2019 年 7 月の登録決定の直前直後は全国のニュース番組だけでなくクローズアップ現代＋にも取り上げられ、古墳の専門家を招いてその価値や今後の課題を伝えるなどやや学術的な側面も報道されるようになった。2020 年以降は、頻度は高くないものの継続して古墳をテーマにした番組が放送されるが、内容は歴史から健康の秘訣を学ぶ番組や全国の古墳をめぐるといったより一般向けの、古墳の知識をそれほど持たない人でも親しみやすい内容と変化した。また紹介される古墳は百舌鳥・古市古墳群だけでなく全国各地の特色ある古墳へと変化したため、人々の意識は百舌鳥・

古市古墳群のブームから古墳ブームに広がったのではないか。

次に民法のテレビ番組について各テレビ局で 2018 年から主にニュース番組で百舌鳥・古市古墳群の登録までの過程が報道されていたが、NHK と同様に 2019 年 5 月にはイコモスの勧告により登録がほぼ決定したというニュースが、少なくとも地上波 5 局で合計 40 回報道された。登録が正式に決まった 2019 年 7 月に再び番組数は上昇し、そのブームが落ち着いてくる 8 月から 12 月には世界遺産を祝福する報道よりも観光面と古墳そのものに焦点を当てた報道が多く、古墳グッズや古墳群を紹介する番組や特番も放送された。2019 年 12 月から翌年 2020 年の 2 月にかけては、クイズ番組に問題として出題されたり秘密のケンミンショーで取り上げられたりするなど、より一般の視聴者が興味を持つような報道のされ方に変化した。その後は旅番組で大阪が特集された際や世界遺産の番組の中で触れられるように頻度と内容の濃さには低下が見られる。

このようにテレビ番組の数を検討すると、2019 年 5 月と 2019 年 7 月を大きなピークとしてブームが存在したことがわかる。取り上げられ方としては、登録の見通しと決定の知らせを伝えるニュースとそれを受けた地元の喜びの声やこれまでの活動、百舌鳥・古市古墳群の基本的情報や学術的な価値、一般の人々にも親しみやすい番組や視点からの紹介といった順序で現在まで百舌鳥・古市古墳群はテレビで報道されている。しかし２つのピークを超えた後は、百舌鳥・古市古墳群だけではなくより広義の「古墳」として取り上げられることになった。また、調査前には 2020 年 1 月頃からの新型コロナウイルス感染拡大の影響が見られるのではないかと予想していたが、この結果からはその影響が大きく出たとは判断できなかった。考えられる要因としてテレビ番組は新聞記事とは異なって、番組の製作開始時期と放送の時期に大きな差が出るということが影響したのではないかと考えた。

（3）　書籍

百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録の前後の、世間一般の古墳への関心を探るため、書籍の発売部数のランキングを調べた。調査対象は、幅広い書籍の種類を扱う紀伊國屋ウェブサイトの検索欄である。

まず、キーワード検索欄で「古墳」と調べ、「売れている順」で表される検索結果 3037 件のうち、上位 50 件を挙げる。調査日は 2020 年 8 月 31 日である。ジャンル分けとして、雑誌・ガイドブック:a、学術書・新書:b 、図鑑:c 、小説:d 、その他:e の符号をつけた。なお、ここでは古墳に関する話題が含まれている書籍を扱うが、「日本史」や「日本の歴史」といった歴史全般の概説を扱った書籍は該当しないこととする。

以上の結果から、現在よく売れている書籍の多くは、百舌鳥・古市古墳群世界遺産登録前後の 2017 年以降の書籍であり(50 件中 30 件)、世間では登録前後で古墳関連の書籍の需要・供給ともに増加傾向にあるといえる。そして、ここで注目したいのが 50 件中 6 件ある雑誌・ガイドブックのジャンルである。このジャンルは、大衆向けで親しみやすい内容となっているため、一般に広がる古墳ブームをうまく反映しているといえる。

そこで次に、同じくキーワード検索欄で「古墳」と調べ、「新着順」で表される検索結果からジャンルを「地図・ガイド>ガイド>目的別ガイド」に絞った結果全 41 件を挙げる。調査日は 2020 年 9 月 14 日である。

結果から、まず、世界遺産登録関連の書籍は 2018 年から出版開始され、2019 年に急増、2020 年では減少傾向にあることがわかる。理由として、世界遺産登録の熱が冷めた、あるいはコロナによる外出自粛が考えられる。また、登録以前は関東を対象としたガイドブックが比較的多く、百舌鳥・古市古墳群に関連した書籍は少なかったようである。そして、2018 年以前は古墳だけに焦点を当てたガイ

ドブックは珍しかったといえる(29 件中 9 件)。しかし 2019 年以降は 12 件中 10 件に増加しており、百舌鳥・古市古墳群の登録が古墳をめぐる関心に繋がっていることが読み取れる。

以上のことから、古墳ブームは書籍の売り上げにおいても確認され、またブームは世界遺産の登録にも確実に影響を受けていることがわかる。しかしコロナによる影響や古墳への興味の薄れも感じさせる結果となった。

2 堺市・羽曳野市・藤井寺市の古墳活用の現状について

百舌鳥・古市古墳群が含まれる堺市、羽曳野市、藤井寺市に世界遺産登録前後における訪問者の増減や各地域の取り組みと課題、またコロナ禍における現状をインタビューとメールでのアンケート形式で実施した。

（1）堺市博物館インタビュー結果

堺市博物館学芸員の橘泉さんと肥田翔子さんにインタビューをさせて頂いた。

来館者…

古墳群の世界遺産登録の直前から急増し、墳丘全体を見渡せる解説付きの VR 体験は多い時で 1 日 90 人ほどが体験した。

古墳ブームについて…

認識はしているが、堺市博物館はあくまでも堺市の博物館であるため、古墳ブームに乗りつつも中世エリアなど他地域・他時代の歴史についても関心を持ってほしいと考えている。

他の自治体との連携…

古市古墳群側との連携としては講演会やボランティア、個人での交流はあるが、行政区画の影響で堺市の予算を使うためどうしても堺市中心かつ古墳だけにお金を使うことはできないという限界を感じている。もっと大阪府に積極的に統括して活用に取り組む形を望んでいる。

感じている課題…

ICOMOS は世界遺産登録を通して遺跡の保存に重点を置いているが、行政としては観光も視野に入れた登録推進だったため、観光のために開発ができないなど認識の乖離が生じている。

コロナ禍の活動…

一時休館を余儀なくされたが、YouTube と Facebook に大人向け、子ども向けのものをアップし、博物館ホームページでは塗り絵を公開するなど発信を継続した。開館後の影響としては、手で触れることのできる体験コーナーの撤去、アンケートの中止や講演会の事前予約制・少人数制への変更などが発生した。

（2）羽曳野市アンケート結果

羽曳野市立陵南の森総合センターの河内一浩さんにご回答頂いた。

古墳ブーム…

2011 年に古墳群がユネスコ世界遺産暫定一覧表に掲載され藤井寺市と合同で普及冊子を作ったことにより、古墳の見学者層がそれまでのマニアから一般人に変化しブームを感じるようになった。

市の活用の現状…

観光案内所のリニューアルやレンタサイクルの整備、登録直後には鉄道会社と藤井寺市との共同イベントを実施、市の行事での広報をするなど観光的・広報的な活用を行っている。

他の自治体との連携…

堺市と藤井寺市とは 2010 年、2016 年に古墳に関する冊子を共同で製作・刊行した。登録後は３市と大阪府との会議が設けられている。

今後の課題…

古墳見学の内容やビジターセンターの建設の問題だけでなく、市長の交代やコロナの影響による課題も山積みである。

（３）藤井寺市アンケート結果

藤井寺市教育委員会文化財保護課の山田幸弘さんと泉眞奈さんにご回答頂いた。

古墳ブーム…

2019 年 5 月頃から徐々にマスコミに取り上げられる回数が増え、来訪者の増加も感じた。写真の掲載申請件数が年間で 100 件近くを数えるなど掲載書籍の数も増加した。コロナウイルスの影響で 2020 年 4 月以降は沈静化しているが、古墳を周遊する人も散見されることから市民の興味は引き続きあるようだ。

市の活用…

古墳を整備して市民の憩いの場として活用を進めており、古墳の保全のため墳丘の植栽調査と間伐を実施して墳丘を観察できるようにしている。また VR や AR を利用したアプリも製作した。

他の自治体との連携…

説明板やルート案内、周遊ルートは堺市と羽曳野市と協議し統一させている。堺市とは交付金を活用した映像を連携して作成している。

活用における課題…

ICOMOS の可能な限り現況を踏襲する考えは古墳の場合には当てはまらず、墳丘上の樹木を放置すると倒木や墳丘土砂の流出が発生する。また墳丘に上るための整備は ICOMOS の考えに即せず、今後海外の専門家を含めた整備計画の作成が課題となる。

以上の３市の行政担当者の回答から大きく３点、①世界遺産登録前後に古墳ブームがあったこと、②新型コロナウイルスの影響を受けたこと或いはこれからもその影響は出てくること、③活用の側面で ICOMOS との意識の差が浮き彫りとなったことがわかった。

※その他、堺市では仁徳天皇陵古墳拝所前にてボランティアガイドの方に、羽曳野市では河内こんだハニワの里　大蔵屋企画営業部長の朝野亜紀子さんに、藤井寺市では古市駅前と藤井寺駅前の観光案内所の方にそれぞれインタビューさせて頂いた。今回は割愛する。

実際に百舌鳥古市古墳群を調査のため周遊して感じたことは、堺市と羽曳野市・藤井寺市の間に行政的な壁があり、百舌鳥・古市古墳群全体としての観光政策が不十分であることである。例えば百舌鳥古墳群と古市古墳群を結ぶバスは無く、両地域への訪問を促す取り組みもあまり感じられず、PR の方法でも羽曳野市や藤井寺市よりも堺市が優勢でメディアでの露出も上回っているといった印象を受ける。「百舌鳥・古市古墳群」として世界遺産に登録されたにもかかわらず、両者の間に格差や相違が見られる原因として、この遺跡群が３市にまたがっており各市で異なる方向性を持って古墳群の活用を行っているからなのではないか。もちろん財政力の違いも影響しているに違いないと考えられる。

3 愛知県での行政区を超えた古墳の活用について

２の考察に基づいて、行政区を超えた文化財活用の例があるか愛知県の志段味古墳群・断夫山古墳（名古屋市）・青塚古墳（犬山市）で行われている新たな取り組みを調査した。志段味古墳群（名古屋市）では名古屋市教育委員会文化財保護室の濵口真哉さん及び体感！しだみ古墳群ミュージアム館長の松井致也子さんにインタビューを依頼し、また青塚古墳ガイダンス施設の学芸員大塚友恵さんをはじめ、断夫山古墳に隣接する熱田神宮公園管理事務所、昼飯大塚古墳の資料を展示する大垣市歴史民俗資料館の職員の方々にお話を伺い、活用の現状を把握した。以下に、これらのインタビューで得られたことや現地で感じたことを述べる。

御墳印について

志段味古墳群・断夫山古墳・青塚古墳では 2020 年 9 月より、「御墳印」と呼ばれる、それぞれの場所でオリジナルの、御朱印のような紙の記念品を販売している。この取り組みは、コロナ禍で外出自粛が続く中、屋外で、かつ愛知県内で完結できる企画として考えられ、また休館が続くミュージアムの来館者目標を達成するために実施された。体感！しだみ古墳群ミュージアムで販売されている御墳印はインタビューを実施した 11 月 28 日の時点で約 540 枚売り上げている。

これら 3 つの古墳の管理は、それぞれ違う行政区の管轄である。しかし、ミュージアムを運営している会社が他の古墳の管理会社と同系列グループであったため、迅速に企画の連携・実施をすることができた。また名古屋市などの行政側からの賛同があったおかげでもあるという。

しかし、今後御墳印を拡大させる上で問題点もある。そもそも御墳印を販売できるようなガイダンス施設をもつ古墳が少なく、またそれらの施設は行政が運営していることが多いため、収益が上がる活動がしにくいという点が挙げられる。

このように愛知県では行政区を超えた活用の取り組みが行われていることがわかった。また御墳印というアイデアはコロナ禍における古墳ブームの持続に寄与したと思われる。

4 愛知県と岐阜県における具体的な古墳活用の事例

次に愛知県と岐阜県で視察した古墳について具体的な活用の事例を挙げる。

断夫山古墳について

原則墳丘に立ち入ることはできず、観光目的の公開はされていない。墳丘の上は、大きな木はある程度切られ下草が生えており、ロープ伝いに登ることができるようになっている。墳丘は堀とロープで区切られている。

志段味古墳群について

名古屋市は、古墳をただ保存するよりも登って身近に感じて欲しいという考えのもと、ミュージアムに併設された公園内の古墳はすべて盛り土をして登ることができるよう整備されている。これは保存と活用のバランスを念頭に置いてのことだという。公園内の古墳はスマホアプリの VR 機能で復元された姿を見ることができる。

古墳群内の志段味大塚古墳は、葺石、埴輪を全体に並べ、完全復元されている。

公園内は地元の人、特に家族連れが多く、良い散歩コースになっている。

青塚古墳について

地元の人の、草が青々とする古墳の景観を守って欲しいという強い要望から、保存が決まった。それまでは地元の人が野焼きを行い、墳丘が見える形で大切に保護してきた。そのため現在では完全復元は行わず、全面が緑に覆われ墳丘の最終段に壺型埴輪の復元が並べられている。

公園内は薄い芝生が広がる平坦な広場となっており、主に地元の人が訪れる。

昼飯大塚古墳について

墳丘は全面完全復元ではなく、一部は葺石や埴輪で復元されており、その他の面は芝生になっている。復元には地元の小学生が関わった。埴輪作りや墳丘の復元を行った児童たちは、その技術やスケールを、身を以て実感したという。

地元の家族連れだけでなく、古墳目当ての観光客の姿もあった。

古墳から少し離れているが、大垣市歴史民俗資料館ではタブレット貸し出しサービスがあり、古墳に持って行くといくつかのスポットでVR体験ができる。

各古墳の復元形態には地域の住民や市町村のニーズに基づいており、完全復元された志段味大塚古墳は、再開発で若い人口が増える傾向から教育のニーズに合っている。草が茂る姿での復元がされた青塚古墳は、昔からの古墳に対する思いが反映され、のどかな町の風景にも合っている。一部だけ復元された昼飯大塚古墳は、復元のための調査や復元を通した教育と、公園としての活用の両方を取り入れている。いずれも公園化の整備など、地域の憩いの場としての活用がされており、古墳ブームとは別の各地域の地道な取り組みを感じた。

５これからの百舌鳥・古市古墳群の活用の提案

百舌鳥・古市古墳群が世界遺産に登録され、外部からの注目を受けたことは大きな成功である。しかし、3、4での考察から、百舌鳥・古市古墳群には今まで以上に行政区を超えた連携と、地域に合った活用の方法が必要ではないかという結論に至った。この２つの目標を達成することにより、古墳ブームを一過性のものにとどめず、またこれからも古墳とともに生活をしていく地元の人々、特に将来の世代にとって、古墳を地域アイデンティティの一部とすることができるのではないだろうかと考えた。

古墳を地域アイデンティティとするために必要なことの一つに、古墳の学術面以外での活用が挙げられると考える。愛知県や岐阜県の例では、古墳を中心に公園整備がされ、それぞれ地域の憩いの場となっていた。地元のニーズに合わせ、堺などでは街中の緑としての古墳を、もっとアピールできるのではないだろうか。

地域アイデンティティの創出には教育面での活用も必要不可欠である。学校の行事に古墳を取り入れるのは一つの例である。ただ校外学習で古墳を訪れるのもいいが、ICOMOSの方針で復元できない古墳のレプリカを生徒とともに制作する案も一つだろう。

また、地域住民と古墳の距離を近づけるためには、古墳のビジュアルを活かすことは重要であると考える。実際、愛知県や岐阜県で整備された古墳を見ると、木々が生い茂る古墳よりも存在感がありより興味を持つことができた。生活圏で視界にいつも古墳があるということは、アイデンティティの創出にやはり効果があるのではないだろうか。

愛知県で行われていた御墳印についても、３市と地域住民が手を携えれば百舌鳥・古市古墳群でも取り入れることは十分可能だと考える。ガイダンス施設がない問題に関しては、カフェやグッズ屋等

の地元の商店で古墳の活用に協力的な人々に依頼することもできるだろう。コロナ禍においても地元の人に楽しんでもらえる機会となると考えられる。

行政区を超えた取り組みとしては、大蔵屋河内こんだハニワの里が 828（はにわ）グランプリという企画を主催し、３市の市長が一堂に会して優秀作品に市長賞を授与したという先例にあるように、３市が足並みを揃えた全国ネットの大きなイベントを企画する必要があると提案する。例えば３市の古墳を 42.195km で周るルートを整備し、国際マラソンや市民マラソンを開催することで、地域住民がホストとなって盛り上げるというのはどうだろうか。現在もずふる古墳マラソンというものが 2018 年より開催されているが、その規模を拡大して行政区を超えた国際マラソン・市民マラソンを実施するのが良いと思う。その時にいつもは全貌を見ることができない大きな古墳もヘリコプターが上空から報道することで、非常に印象的な古墳のＰＲにつながると想像する。また、市民マラソンならではの参加者の古墳コスプレも話題性が期待できる。この企画の良いところは地域住民と外部からの人々が接点を持ち、より古墳に親しみを持つことである。

このように、これからの古墳ブームは地元の人々と地元以外の人々が共通の話題として楽しみながら継続していく方向性が良いのではないか。そうすることで、古墳ブームを一過性にすることなく持続的な文化財活用が進むのではないだろうか。

Ⅲ総括と課題

百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録を受け、古墳ブームは確実に飛躍し、特に両古墳群への観光客数は増加した。しかしながら、その客足は新型コロナウイルスの影響により大きく減った。現在少しずつ戻りつつあるが、以前のようなブームを取り戻すには新たな一手が必要になるだろう。

ところが、百舌鳥・古市古墳群を管轄する行政区の違いのため、全体的な古墳の活用の点においてその協力が困難な面があることがわかった。また、保存を第一義に考える ICOMOS と、観光を視野に入れた活用を展開したい行政には意識の乖離があり、活用が進まない原因の一つと考えられる。古墳は現在まで創建時のまま残っている西洋の石造りの文化財とは違い、人の手を加えなければ墳丘が崩壊する恐れがあるという点については粘り強く訴えていく必要がある。

ここで考えたいのが、古墳ブームの一過性についてである。「古墳に来てもらう」ことだけに注目し、集客性の高いイベントなどをどんどん展開するのも、一つの活用案だろう。しかし、長く人々の関心を得るのは、愛知県や岐阜県で見た、地元に愛される古墳だといえる。百舌鳥・古市古墳群は、世界遺産登録のおかげで外部からの関心が高まった。しかしそれがブームとして一過性で終わってしまう可能性があるのは、外部からの関心に伴わず内部、地元の関心が希薄であるからではないだろうか。

地元に愛されるため、つまり地域アイデンティティの創出には、古墳の学術的以外の活用（例えば公園整備など）、教育面での活用、また生活圏の視界に古墳が入るビジュアル面での活用が必要であると考えられる。もちろん、これらの活用には行政と民間企業・団体が連携して、地域住民が古墳にもっと関わる機会を増やすことが重要である。

今回の調査にあたって、主に百舌鳥・古市古墳群と、愛知県・岐阜県での活用の比較を行なった。この比較については、古墳群の規模や行政区の違いなどを考慮に入れず、単純に比較することは妥当でない。なぜならば百舌鳥・古市古墳群は世界の百舌鳥・古市古墳群だからである。世界遺産登録を単なる一過性のブームにとどめることなく、持続可能な活用を進めることが、今後の重要な取り組みになると考える。コロナ禍により外国人観光客も減少する現在、一度立ち止まって古墳の活用の方法を見直す時期に来ているのではないだろうか。

【参考文献】
蓮井寛子ら（2018）「古墳ブームにみる遺跡活用の将来像」平成２９年度学部学生による自主研究奨励事業成果報告書
世界遺産登録もずふる古墳マラソン in 大仙公園＜https://mozufuru-kofun-marathon.jimdofree.com/＞（2021年1月8日参照）